オナニーにハマったお嬢様が執事にバレてオナニー指導されるようになるお話

大和ソウ

【登場人物】
・東条ユイ
21歳。
東条家のお嬢様。
素敵な恋愛を夢見るが、なぜか彼氏ができない。
望み薄なため妄想オナニーに走る。

・神屋忍
28歳。
東条家の執事。
細かい性格で、ユイにとっては目の上のたんこぶ的存在。
ユイのことを慕っているが、立場の差から自分の仕事に徹していた。
真面目な変態。むっつりすけべ。

1

東条家の大事な一人娘……それが私。お金と時間を持て余し、あとは花婿を見つけるだけ。そんな生活を送って数ヶ月。

そんな私の趣味が「オナニー」だった。

「ん……っぁ……」

布団の中で指を陰核に這わせ刺激する。声は必死に押し殺し、一人快感に悶える。

大金持ちのお嬢様ならもっと豪華な趣味を想像するかもしれない。けど、私にとってはこれが最上だ。

いもしない恋人と触れ合う時間を妄想し、ひたすらオナニー。これぞ至福。

だが、その時間が終われば快感は消え、あっという間に虚しさが訪れた。

だだっ広い部屋にポツンと置かれたベッドの上で、一人切なさを噛み締める。

――――はぁ。なんで私には彼氏ができないんだろ。

私ももう年頃だ。周りのお嬢様たちはみいんな恋人がいるのに、私にだけ恋人がいない。

と言うのも、簡単なお話だ。みんなは親が相手を決めているけれど、私は恋愛結婚をしたいから。

ありがたいことに、両親は私の意思を尊重してくれた。だから同世代の女の子たちみたいにお見合いをさせられることはなかった。その代わり、私が自分で相手を連れてこなければならなかったのだけれど。

けれどこれが難儀だった。東条家のネームバリューが伊達じゃないだけに、寄ってくる男性はみんなお金目当て。私がいいと思うような男性はいなかった。

私のことを愛してくれて、大事にしてくれる人。割とシンプルな条件だけれど、これが難しいのだろうか。それとも、恋人にすらそんなこと求めちゃいけなかったのか。

そんなこんなで、恋人探しは全くうまくいかず、欲求不満が溜まってオナニーに走ることになったわけだ。

コンコン、とノックの音が鳴った。多分、執事の神屋だ。私は慌ててベッドから起き上がって窓際のソファに座る。

「どうぞ」

扉が開いて、扉から男が一人出てくる。東条家に仕える執事、神屋忍だ。

「お嬢様、午後の予定ですが――――ん？　はぁ、またお昼寝をしていらっしゃったのですか？　寝癖、ついていますよ」

「はっ!?」
慌てて髪を手櫛で梳かす。真っ赤になる私に、神屋は淡々と言い放つ。
「嘘をつくならもう少しバレないように」
神屋は数年前から東条家に仕えてくれている執事だ。仕事は館の全般を担当しているけれど、私のお世話係も兼ねている。だけど、私はあんまり好きじゃない。
神屋は口うるさいし、細かい。さっきみたいにいちいち指摘してきて、面倒だ。
もちろんそれに助けられることもあるんだけど……どうせならもっとおおらかで優しい人がよかった。
「それで、午後の予定です。旦那様の代理で行く藤堂家のパーティですが、夕方の五時には出発しますので、それまでにご用意をお願いいたします。送迎は私がいたしますので」
「はいはい。分かったってば」

「はいは一度で。きちんとしたレディーになりませんと、旦那様と奥様が嘆かれますよ」
「う、うるさいなあ！」
ほんっと、いけすかない男。

その日の夜、予定を終えて屋敷に帰ってきた私は、なんだかお酒に酔ったせいかまだ着替えてもいないのにベッドの上に寝転んだ。
父の代理で行ったパーティのメンツはいつもと変わり映えがないけど、妙齢なのにご縁のない私にズケズケと質問を浴びせてきてとても嫌だ。
一言目にはお相手は？　二言目にはうちの親戚を紹介しましょうか？　もう嫌になる。素敵な恋人がいればあんな思いをせずに済むのに。
酔ったせいか、なんだかムラムラする。私の指は自然と下半身に伸びた。

パーティドレスの裾をめくり、下着の上からアソコを撫でる。目を瞑り、架空の人物を頭の中で想像して、自分を慰めた。

恋人がいたら、こんなふうに触ってもらえるのに。いっぱい甘えて、イかせてもらって、最後に言うの。「挿入って……」って。

「お嬢様……なんてはしたない格好をしているんですか」

「あ……っだって、わたし……」

「……旦那様が見たら卒倒しますね」

「そっと……え？」

私は意識を覚醒させ、目を開けた。神屋が扉の前に立っていた。

――――え、なんで神屋が……。

状況を悟り、背筋に冷たいものが伝う。どう言ったらいいか分からず、狼狽えるしかできなかった。状況が理解できない。

「入浴の準備ができたとお伝えにあがったのですが。取り込み中に失礼いたしました」

神屋はロボットのように応える。顔色はいつもと同じ。私と違い、微塵も動揺していない。

「か、勝手に入らないでよ！」

「もちろん、伺いました。そうしたらお嬢様が『はいって』と仰ったので」

――――うわぁぁ……。最悪……。

それは「入って」じゃない。「挿入って」の間違いだ。

どうやら私は相当酔っていたらしい。寝ぼけていた……ううん、オナニーに夢中で、夢と現実の区別もついていなかった。

恥ずかしい。穴があったら入りたい。なんだか自分が情けなくなってきて、ボロボロと涙が溢れる。

「……っどうせ呆れてるんでしょ！　年頃のくせに恋人も作らないで……って！　私だって一生懸命やってるんだから！　けどしょうがないじゃない！　誰も私のこと好きになってくれないんだからぁ……」

お酒のせいか、我慢していた感情が溢れ出す。神屋に言ったって仕方ないのに、考えていたことが全部口から飛び出してしまう。

「そんなこと、思っていませんよ」

「じゃあなんで誰も私のこと好きになってくれないのよ……っ」

「私は好きですが」

はた、と感情が止まる。ちらりと神屋の方を見た。彼は普段と変わらない真顔だ。先程の言葉に相応しい感情を顔に浮かべてはいない。

「な……何よ突然。冗談はやめてよ」

「冗談ではありませんよ。私はお嬢様を女性としてお慕いしております」

「嘘っ！　いっつも意地悪いことばっかり言うじゃない！」
「執事でございますから。多少は心を鬼にしないと仕事ができませんので。好きで小言を申し上げているわけではございません」
う、うそぉ。神屋が私を好き？　そんなの、考えたこともなかった。
神屋はどっちかといえば無愛想だし、淡々としててクールだ。私が妄想する理想の恋人とは違う。
――――本気なの？　でもあの神屋が冗談を言うとは思えないし……。
「ですが私も立場を弁えておりますから、自らお嬢様をどうこうしようとは思いませんよ」
「そ……そう、なんだ」
「ですからご安心ください、お嬢様がオナニーにふけっていたとしても誰かに告げ口したりは致しません」

「ふけってないっ！」
「おや。恋人ができず、下の口が寂しくてオナニーをしていたわけではないのですか」
「……っ下品なこと言わないで」
「お下品なのはお嬢様の方では？　はしたなく脚を広げて、大切な部分を指でいじり倒していたわけですから」
「……っ」
慌ててぎゅっと脚を閉じる。色々見られてしまった後ではあまり意味を持たないが、この状況で神屋に見られているのはとてつもなく恥ずかしい。
「私だったからよかったようなものを。そこらの男性に見られていたらとっくに襲われていますよ。それと、無闇に手で擦りすぎです。やるならもっと優しくしないと。せっかく綺麗な色が黒ずんでしまいますよ」

そんなこと分かっている。だけど相手がいないんだからどうしようもない。
――――ああ、だめ。途中でやめちゃったからすごくムズムズする……。
「手伝って差し上げましょうか？」
「……え？」
「最後までイけなかったから辛いんでしょう」
突然の提案に、私はきょとんとした。神屋が手伝う？　何を？　オナニーを？
「こう見えて手先は器用ですので」
「えっ⁉ ああっ」
神屋は突然近づくと、手でガバッと脚を開いた。さっきまでオナニーしていたアソコはずっと潤ったままで、脚を開くと同時にぬちゃ、とした感覚がした。
「やだ、神屋ぁ……っ見ないで……っ」
「さきほど存分に拝見しましたので。今更見ないでとおっしゃられましても」

くぱあ♥とアソコを広げる。すっかりびしょびしょになった場所は外気に晒されてひんやりとした。

あの神屋に見られてるなんて……っ。神屋にいっぱいオナニーしたことがバレちゃう……っとろとろになったアソコ見られちゃう……っ。

「ああ……こんなにとろとろになるまでオナニーしたのに途中でやめてしまったんですね。お辛いでしょう。冷まして差し上げます」

ふー♥と息を吹き付けられる。アソコと、陰核が不意にひんやりしてびくんと震えた。

「んんっ……♥」

神屋は私のアソコに顔を近づけると、まじまじと観察し始めた。

「私が知る限り……お嬢様は処女だったかと思いますが、この濡れ具合は驚きですね。一体いつからオナニーを？」

「そ、そんなの覚えてない……っ」
「これだけ濡れるということは初心者ではないはずです。かなり前からオナニーをしていましたね？」
「言わないで……」
「別に怒ってなどいませんよ。正しい性の知識を学ぶことは重要なことですから。お嬢様が将来子供を産むときに役に立ちます」
神屋の指の腹が私の陰核につん、と触れる。私は驚いて体を震わせてしまった。
「ふむ……クリトリスの周りがベトベトしていますね。察するに、お嬢様のオナニーはクリトリスへの刺激が主でしょう。こうやって、クリトリスの周りをくるくると刺激していたのではありませんか」
「あ……ん……♥や、やだ……っそこ……♥」

神屋の指が陰核の周りをクルクルと弄る。自分でもしていたのに、神屋がやる方がずっと気持ちいい。強すぎず、どちらかといえば弱い刺激で、なんだかもどかしい。もっともっとしてほしいと思ってしまう。

「ああ……お嬢様の膣が、ヒクヒクと動いていますよ。クリトリスの刺激が気持ちよかったんですね。ではもう少し触ることにしましょう」

今度は指の腹で陰核の頭をゆっくりと撫でる。さわ、さわ、と撫でられるたび、陰核がぷるん、ぷるんと震えた

「いやぁぁぁっ♥♥だめ、それ……っ♥♥気持ちいい♥♥」

「それ、とはどこです？　きちんと言いましょうね」

「く、くりとりす……っ♥指でくりくりしないで♥♥」

「くりくりとは、こうですか？」

くりっ♥♥くりっ♥♥と、さらに指で撫でられる。

「んあぁぁあっ♥♥気持ちいい♥♥」
「なるほど。お嬢様はクリトリスをくりくりされるのがお好きなようですね。覚えておきましょう」
「ん〝あ♥♥だめ♥♥そんなにしたら♥♥おかひくなる♥♥」
神屋は何度も私のクリトリスを撫でた。けれどあと一歩と言うところで指を離してしまう。私が我慢の限界を迎えようとすると、サッと指を引く。まるでイかせまいとしてるみたいに。
「神屋……♥は……早くイかせてぇっ♥♥お願いだから……♥」
「いけませんよお嬢様。そんな中高生の男子みたいに、イければいいみたいな考え方をするのは。特に、お嬢様は恋愛がしたいのでしょう。それなら、最高に気持ち良くなってイって頂かなくては。誰かとお付き合いしたときに困りますからね」
「そ、そんなあ……」

「もっと脚を開いてください。舐められませんから」
「はうっ♥」
なにか柔らかいものがクリトリスに触れた。神屋の舌だ。ゆっくりと、下から上にクリトリスを舐め上げる。一番最後、クリトリスの先端にたどり着くと舌先を残しながらぺろん、と舌を離した。
「クリトリスがカチカチですね。やはり先ほど、オナニーでいじったのでしょう」
「うう……っご、めんなさ……」
「怒っていませんよ。女性がオナニーをするのはごく当たり前のことです。男だってしますから、おかしなことではありませんよ。ですが、先日度も申し上げた通りあまり擦りすぎると痕が残ります。扱うときはもっと丁寧に、優しくやらないと」

舌先がちろちろ、とクリトリスの先端をいじめる。指でするよりずっと気持ちいい。柔らかくて、程よい刺激だ。そのままきゅう♥とクリトリスを口に含むと、軽くちゅっと吸い込まれた。

「んっ♥♥あ、それ……っ♥♥」

「ん……♥♥お嬢様の、クリトリスは柔らかいですね♥♥ちゅ、んむ♥♥舌でこねると、こんなに……♥♥」

ちゅく♥♥ちゅるるる♥♥んぢゅっ♥♥

「ふあああ♥♥やだ、だめぇ♥♥イっちゃう♥♥そんなに吸われたらイっちゃうからぁ！」

クチュ……と突如唇が離れた。私は半分呆然とした頭で脚の間からぼんやり神屋を見つめた。

――――え、どうしてやめちゃうの……？

「ここまでにしましょう」
「え、どう……して……？」
「私はお嬢様の恋人ではございませんので。そこから先の役目はきちんとした男性にお任せになるのがよろしいかと」
そんなひどい言い訳があるだろうか。ここまで気持ちよくさせておいて、これでは蛇の生殺しだ。恋人なんていないから一人でオナニーしていたのに。
アソコが熱い。神屋のせいでずっとムズムズする。どうにかこの熱を鎮めてほしい。
「ですがまぁ、お嬢様がイかせてください』とご命令すれば、なんなりと従いましょう」
「な……っ」

「私は命令通りにしか動きませんので」
悪魔のような微笑みを浮かべ、都合よく執事らしいことを言ってみたりする。なんて意地悪な男だろう。神屋に頼むだけでも恥ずかしいのに、そんなセリフ。
けど、ここまでしたのにこのままイけないなんて不完全燃焼だ。それに――――
誰かとエッチしてみたい気分でもある。私はごくりと唾を飲み込んだ。
「イ……イかせて」
「……承知いたしました」
その時、神屋が不敵に笑った。
「では、気絶するほどイかせて差し上げましょう」
再び私の脚の間に構えると、指でびらびらを左右に開く。その間にそそり立ったクリトリスに唇を近づけ、キスするようにちゅ♥と触れた。

「お嬢様のクリトリス……は、あ……こんなに硬くなって、まるで男性のペニスですね。しかも、すごく熱い。興奮しているようです」
「あ……っや、だ♥♥言わないでぇ……♥」
「ん、ちゅっ♥♥では、僭越ながらお嬢様の勃起したクリトリスを吸わせていただきます……♥クチュ♥♥ちゅるる♥♥」
「はふ♥んぁ……気持ちいい……♥♥神屋、それ……気持ちいいの……♥♥」
「もっとご命令いただければ更に気持ちよくして差し上げますよ。さあ、言ってください。『私のクリトリスをいじめて』と」
「ア……ッ♥お願い……わたしの、クリトリスを……いじめて……♥♥」
私何言ってるんだろう♥相手は神屋なのに♥こんなえっちなことしちゃいけないのに♥
「では、遠慮なく」

くにくに♥こりっ♥くにゅっ♥♥

指が何度もクリトリスを摘んで、くりくりと揉みしだく。さっきみたいに弱い力加減でなく、もっと力強く。私の体は電流が走ったみたいに痙攣して、ビクビクと腰を浮かせた。

「ひぐうぅっ♥ひゃああ♥らめっ♥いっぢゃう♥クリぢゃんいじめらいでっ♥♥」

「『クリトリスをいじめて』と言ったのはお嬢様ですよ？」

「いっぢゃうから♥おかひくなるから♥クリぢゃん引っ張らないれ♥ひう♥あひい〰〰〰〰〰〰♥」

「なるほど。引っ張られるのもお好きなんですね。そうですよねえ、自分じゃこんなことできませんから……では、もっとして差し上げます。ほら、どうですか？」

クリトリスが指でピンっと摘まれる。あまりに強い快感に私は体を大きくのけぞらせた。

「ぐぎぅ〜〜〜〜〜〜っ♥クリちゃん引っ張られてイっぢゃうよお〜〜〜〜〜〜♥」

体から一気に力が抜ける。私は脱力し、しばらくの間息を貪った。

――――――ああ♥気持ちよかった♥自分でするのよりずっと……♥♥

「しっかりイけたようですね。膣がこんなにとろとろになっていますよ」

指で陰部に流れる愛液を掬い取る。神屋は笑みを浮かべながらそれをべろりと舐めた。

「お嬢様、いかがでしたか？　もしよろしければまたお手伝いさせていただきますが」

ぬるぬるのクリトリスをツン♥と触られる。また気持ちよくてぶるりと体が震えた。

「あ……っ♥か、みや……♥して……♥♥オナニー手伝って♥♥」

「御意。……ああ、汗とお嬢様の愛液でドレスがびちゃびちゃですね。しっかりきれいにしておかないと」

2

広い湯船に浸かり、ぼんやりと宙を見る。考えるのは、うるさい小姑みたいな執事のことだ。

神屋と私が奇妙な関係になってしばらく。

やっぱり私は、彼の好意が信じられない。相変わらず小言が多いし、口うるさい小姑みたいだ。

――――私が好きなんて、やっぱりあの場のノリで言っただけ？　でも神屋が冗談を言うとは思えないし……。

普段の神屋は完璧な執事だ。うるさいのはともかくとして、私のスケジュールを分刻みに完璧に把握して、きちんとサポートもしてくれる。何もかもおまかせてしてもいいほどの男。顔のことは考えたことないけど、多分そんなに悪くない。表情筋さえ動かしてくれるなら。多少は格好良く見えた。

けどその神屋が私のことが好きなんて。やっぱり何かの冗談としか思えない。

――――でも、神屋えっち上手だったなぁ。

その時のことを思い出すと、体の奥がじわりと熱くなる。私の手は自然と下半身に伸びていた。

「ん……っあ……」

神屋の手付きを思い出し、突起に触れる。指の先端で撫でたりこねたりを繰り返す。

あの時は自分でした時と全然違った。強制的に快感を与えられて、頭が真っ白になった。あんな風にえっちできたらどんなにいいだろう。

何度もクリトリスを指で弾く。チャプチャプとバスタブに波が立った。

――――ああっ、もうだめ……♥

大きく息をついてぐったりとバスタブにもたれた。肩を上下させながらしばらく物思いにふける。

気持ちよかったけれど、神屋がやったのとは違う。彼がやった方がもっと気持ちよかったのに……。

というか、バスルームでオナニーしたせいかのぼせてしまったらしい。頭がフラフラする。

「お嬢様？　大丈夫でございますか」

バスルームの外で声がした。神屋の声だ。

「神屋……？」

快楽にふけった頭でぼんやりと答えると、「失礼します」と慌てた声が聞こえた。

「つお嬢様！　どうなさったのですか」

ぐったりとバスタブにもたれた私を見て、神屋が驚く。
「だ……い、丈夫……だから……」
「どこがですか！」
そのまま私の体を持ち上げ、びしょびしょになるのもお構いなしでバスルームのタイルの上に下ろした。
「貧血ですか。水を持って参りますので――――」
「いいから……違うから……」
神屋は訝しげに私を見つめたが、やがてその視線を私の下半身に落とした。
「……失礼します」
「あ……っ」
神屋の指がアソコの割れ目に這わされる。ぬるりとしたものに触れると、神屋の表情が困ったように眉を歪めた。

「……お嬢様、オナニーしましたね？」
「……っ」
「こんなに濡らして……はしたない人だ」
「んんっ……」
指がくちゅくちゅと何度も往復する。擦れた指が軽くクリトリスに当たって気持ちいい♥
「あっやだ、神屋ぁ♥♥濡れちゃうからぁ……♥♥」
「とっくに濡れてますよ。まったく……なかなか上がってこないと思ったらオナニーですか。お嬢様も相当欲求不満なようですね」
言いながら神屋は何度もアソコを擦る。私はもっと強い刺激が欲しくなって、さっきイったばかりなのも忘れて求めた。
「か、みや……っ♥ア……♥おねがい……っ♥オナニー手伝って♥」

「……っ仕方ありませんね」
神屋はバスタオルを持ってくると、タイルの上に敷いた。その上に私の体を寝かし、脚をM字に開かせる。
「少し指を入れますが、構いませんか」
確認を取られ、私は頷く。一人でオナニーしているときに自分で入れてみたことがあるが、濡れた状態ならそれほど痛くなかった。だから特に抵抗はなかった。
白くて細長い、骨張った指先がつぷ……♥と膣の中に入っていく。
「初めて入れたのにこれだけすんなり入るとは……さては、自分で入れたことがありますね。ほら、こんなに奥まで入る」
ぐちゅぐちゅ♥と中を指で動かされる。お腹を押し上げられているみたいで、子宮の奥がムズムズした。
「あ……♥そこ、へん♥奥がムズムズするの♥」

「ここがGスポットですよ。こうやって指で押し上げると気持ちいいでしょう。お嬢様の膣がヒクヒクしてます」
「やあ♥♥それ……っ♥お腹変になるぅ♥あ、だめ♥なんかへん♥んあぁぁぁ♥おしっこ出そう♥だめ♥出ちゃうからぁ♥♥」
「出していいですよ。見ていてさし上げます」
「んぁ♥♥ほんとにでちゃうの♥いや♥そこ押さないで♥♥でちゃう♥おしっこしちゃう♥ふあぁ〜〜〜〜〜〜♥♥」
プシャアアッ♥♥と膣から透明な液体が吹き出す。バスタオルに吸収されていくそれを見ながら、私は体をガクガク痙攣させた。
――――やだぁ♥神屋の前でおしっこしちゃった……♥♥
「ああ……これは、お湯ですかね。お嬢様がバスタブの中でオナニーなさっていたから、子宮が緩んで入ったのでしょう。尿ではありませんよ」

「あ……」
「おしっこをしたと思って恥ずかしくなったんですか。可愛らしいですね」
「……っ」
膣の中に入れた指をそっと抜く。ぬるぬるの手には愛液が。袖口はさっき吹き出したお湯でびしょびしょになっていた。
私のアソコはイったおかげで満足したけれど、そのさらに奥を求めてぱっくりと開いている。
「物欲しそうにヒクヒクさせて……困りましたね。私はそこまでのものは与えられませんよ」
「神屋……おねがい……もっと、して……♥」
自らアソコを両手で広げる。丸見えになったアソコがヒクヒクと収縮しているのが分かる。

神屋にもっといっぱいエッチなことしてほしい♥おまんこいじってほしい♥そんな欲求が沸々と湧いた。

「……はぁ。まったくあなたという人は……どうなっても知りませんよ」

神屋は私の体を起こすと後ろに回って抱き込むように支えた。そのままボディソープのボトルを何度か押して、出てきた液体をそのまま私の胸に擦りつける。

「ぁ……っ♥おっぱい揉んじゃやだ……♥」

「揉んでいませんよ。洗っているだけです。お嬢様の胸は柔らかいので、優しく洗って差し上げないと……」

優しい手つきでふわふわと胸を揉みしだく。ボディソープのせいでぬるぬると滑る。けれど、いつまでもその頂には触ろうとしない。私はもどかしくなって体をくねらせた。

「神屋……お願い……」

「ん？　どうしましたか？」
「ちくび……触って……」
「おや、そんなところまで洗う必要がありますか？」
「〜〜〜〜〜〜っおねがいだから♥ちくび……触ってほしいの……っ♥」
「仕方ありませんね」
左右の手の人差し指が乳首の先端にとんっ♥と触る。それだけでも十分気持ちいいけれど、神屋は何度も立て続けに乳首の先っちょをタップした。
「あ……っやだあぁ♥とんとんしないで♥敏感なの♥」
「ん？　では擦ったほうがお好みですか？」
今度はこすこす♥と指の腹で乳首の先っちょを擦る。さっきよりも強くなった刺激に私の腰が浮いた。
「ひあっ♥♥それ気持ちいい♥♥指でコシコシしないで♥」

「乳首が硬くなっていますよ♥お嬢様は乳首を刺激されると気持ちいいんですね♥」
「あっ♥しゅき♥ちくびしゅき♥♥クリトリスもぜんぶしゅきなの♥♥」
「とんだ淫乱ですねぇ。私はただ体を洗って差し上げているだけなのに……」
乳首をいじっていた手が離れる。神屋はシャワーのヘッドを手に取ると、お湯を出して私の体にかけていく。少し強めにコックを捻ったのか、いつもより強い。その刺激をそのまま、私の乳首に当てた。
「んぁあっ♥♥」
「たくさん洗いましたからねぇ。しっかり流さないと」
「ひあああああ♥♥これやら♥ちくびチクチクするの♥」
「ダメですよ。しっかり流さないと後でかぶれますから。ここも、入念に流しますね」

そう言いながらシャワーヘッドを今度はクリトリスに持ってきた。突然の強い刺激に驚いてビクビクと感じてしまう。

「〜〜〜〜〜〜っ♥♥」

「ここはたくさん雑菌が溜まる場所ですからね。お嬢様は普段からオナニーをなさっていますから、特に綺麗にしないと」

「ひいい〜〜〜〜〜〜♥♥らめ♥ぐりどりすじんじゃう♥♥♥シャワーにイかざれちゃう♥♥」

「おや、すっかりアへ顔ですね。クリトリスもはち切れそうになっていますよ。余程シャワーの刺激が気に入ったんですね」

「イぐぅぅ〜〜〜〜〜〜♥♥あらまおかひくなっひゃう〜〜〜〜〜〜♥♥はひ〜〜〜〜〜〜♥♥」

「はしたない顔ですねぇ。そんなんじゃ恋人なんて出来ませんよ。ホラ、もっとイってください。お嬢様のいやらしい顔がよく見えるように」

鏡に写っている私の顔はすっかり歪んでいた。舌を突き出し、半分白目になりかけで、淫らに脚を広げている。後ろにいる神屋は……満足げに笑っている。

シャワーヘッドがぎゅっとおまんこに押し付けられる。とめどなく溢れる流水に打ち付けられて、私はもう限界だった。

「イぐぅ♥♥イぐのっ♥♥おまんこシャワーでイがざれちゃう♥♥がまんれきにゃい♥♥んぁぁぁぁ〜〜〜〜〜〜♥♥」

ブシャアアア♥♥

シャワーに逆流するように何かが奥から噴き出した。体から力が抜け、ぐったりを神屋の胸にもたれかかる。水に打ち上げられた魚のように何度も痙攣しながら、水蒸気でぼやけた宙を見つめた。

――――――あ゛あ……ら、め……♥♥も……むりぃ……♥♥

「何をへばっているんですか。まだ終わっていませんよ」

「んぎぃっ♥♥」

終わったと思ったシャワーが再びクリトリスに当てられる。強烈な水流が当てられ私は半狂乱になった。

「ひいっ♥♥らめぇ♥♥もうイったのに♥♥おかひくなる♥♥あたまへんになりゅ♥♥」

「ダメですねぇ。適当なオナニーばかりしているから耐えられないんですよ。オナニーはね、気絶するまでやらないと♥」

「ひいぁぁぁぁ〜〜〜〜〜〜♥♥あひ♥♥おねがい♥♥ゆるひて♥♥ほんとにへんになっちゃう♥♥くるっちゃうから♥♥クリトリスおかひくなりゅ♥♥ばかになっちゃう♥♥こんなにされたらぼっきしちゃう♥♥ん゛あ゛あぁぁぁ♥♥」